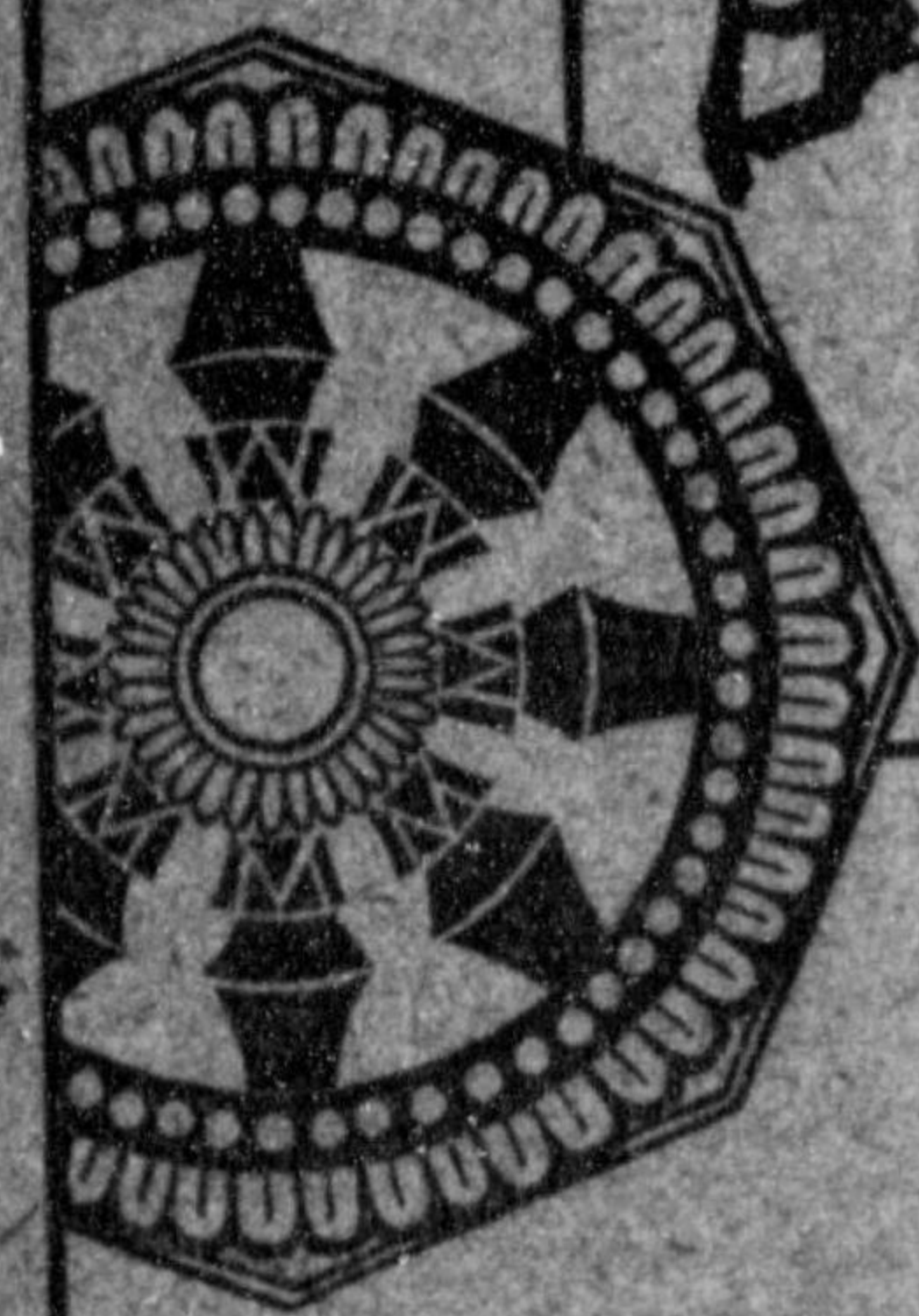


弘法大師



真言宗傳道圖



269
T25

- 一 御誕生の事
- 二 御身を捨て給ふ事
- 三 學問及御修行の事
- 四 眞言秘密の經を得給ふ事
- 五 震旦へ渡り給ふ事
- 六 清涼殿御身成佛の事
- 七 神泉苑に雨請し給ふ事

- 八 假名文字を作り給ふ事
- 九 宮中御修法の事
- 一〇 御入定の事
- 一一 御誓願の事

弘法大師

真言宗傳道團編

御誕生の事

弘法大師は諱を空海と申し奉り、今を去ること一千百三十九年の昔、人皇四十九代

仁天皇の御宇、寶龜五年六月十五日諸岐國多度郡屏風が浦に御誕生遊はされました、

父は佐伯の直田公、御母は阿刀氏玉依姫と申し奉ります、御先祖は高皇彥靈尊より出で

第十五世倭故宿禰の時、允恭天皇の命に由り讚岐國造に任せられ、その後、世々讚岐國を領して居られました、寶龜四年七月、或夜第二十三代佐伯直田公御夫婦もろ共に高樓に月を賞して思はず、まどろませ給ひし時、室内に異香薫じ音樂の音遙に聞ゆ紫雲空に

暖き光明赫々と照し、其中より端嚴微妙の聖僧現はれて微妙の御聲にて告げ給はく、

「我れはこれ弘法利人の菩薩なり今や釋尊既に涅槃の雲に隠れ給ひ、當來成佛の彌勒

3. 26
内交

慈尊は五十六億七千萬歳龍華三會の曉ならでは出現し給はず、二佛中間の衆生を救はむがために下生せむとす、暫し汝が胎内を借るべし」と仰せられました、玉依御前は且は驚き且は喜び給ふ内に間も無く御目醒めになりました、此事委細に夫公に語られました處、夫公も同じ夢を見給ひし由にて、互に顔見合せ不思議の事かなと御感嘆遊ばされましたが、玉依姫は、その日より御懷妊遊ばされました、それより益々神佛に歸依せられ身心の健康と御安産とを祈られ、寶龜五年六月十五日懷胎十二ヶ月にして玉の如き男子を御安産遊ばされましたが是れが即ち我が大聖 弘法大師であります。

吾々凡夫が生れますのは前世の業力に引かれて人間世界に生を受けるのでありますが、大師の御降誕は全く吾々と異なり御入胎の砌り御託宣ありし如く、「釋迦佛には先立たれ當來成佛の彌勒慈尊には遅れ、智慧の眼の盲ひたる我等衆生を救ひ給はむとの御思召より御降誕遊ばされたのであります、それ故大師平生の御言葉には「提葉凋落して久し矣龍葩何れの春をか期せむ」と仰せられ、鳥羽院長承二年の官符には「大師の本地は辱なくも大日覺王十方諸佛の能化にして垂迹は是れ三地の薩埵六趣群生の歸する所」と示さ

れ、又大師の御誓願の中にも、前佛茲に入相を示し百億の一身法輪を轉ず、當來の導師も亦復此の如くなるべし、我今中興の任に膺る故に出生を譲らず」と自ら降誕の由來を御示し下されてあります。

御誕生の御誓願既に此の如くでありますから古人も

日は沈み月はまだ出ぬ黄昏に

かゝげて照す法のともしび

と御讚め申してあります誠によく意を盡して居ります、釋尊の先に既に隠れ給ひしは日の既に没したるが如く、彌勒の出世尙は遙なるは月のまだ出ざるが如し、此二佛中間の黄昏時に貧賤邪見の闇に迷ひ罪惡の淵に陥る我等衆生を感み給ひ三世常住の眞言の法燈を挑げて、衆生長夜の暗を照し、正像末の分ち無く、上根下根の隔てなく、何人をも御救ひ下さるのは、唯だ我が弘法大師あるのみであります、依て吾々衆生は偏に大師を二佛中間の御導師として仰ぎ奉らねばなりません。(常葉興智)

二 御身を捨て給ふ事

人間と云ふものは、日々悲んだり、苦んだり、怒つたり、泣いたりする事のみ多くて笑つたり、歡んだりすることは滅多にありません、よしあつた處でそれはホンの暫くで直に消えてしまうのであります。古人も歡樂極まつて哀情多しと云うて居りますが、誠に其通りで樂しかつた後には必ず悲みがかかります。中にも病氣の苦み、貧困の苦み、親に離れ、子に別るゝ生死無常の苦みは人間世界に於て誰人も免れざる大なる苦みであつて、若し免るゝ事が出来るならば早く免れたいと思ふのが人間一般の願であります。それ故若し眞實に此願を充實して下さる人がありましたならば私共は如何に喜んでその膝下に馳せ、座邊に侍りて有り難きみ教に預かることでありませうか。

吾が宗祖弘法大師様は、かゝる苦みの人々を救ひたいとの御心から、御齡僅か七歳、世の常の小兒なればまだ母の懷に抱かれて乳を求め、甌具を弄ぶに餘念なき時代なるに大人も及ばぬ大誓願を御立て遊ばされ

我れ將來佛法を弘め、普く人生を救ふことを得ば、願くは如來我が爲に證明を垂れ給へ、我願若し成就せずんば今此命を如來に供養し奉らん

と御館の西北倭濃山の高嶺より千仞の谷間に御身を躍らせて如來の證明を請はれたのであります。斷じて行へば鬼神も之れを避くと申します、況してや自己を犠牲にし、命を懸けての御誓願でありますから、天地鬼神悉く感動せぬものはありません、天人は忽ちあまくだりて大師を宙に抱きとめ、釋迦牟尼如來は雲間より大光明を放ちて御出現遊ばされて誓願成就の旨を御告げなされました。

是に由りて觀ますれば、大師様が御本懷の通り御一生に即身成佛を御遂げ遊ばされたのも、後々になされたる御偉業も、二佛中間の大導師として吾等に攝取の御手を垂れさせ給へるも、皆此大誓願の根幹より花を開き實を結んだ者であります。

めぐりあはんことの契を頼もしき

いかしき山の誓ひ見るにも

大師様はかゝる尊き、有り難き、慈悲の聖者におわしますから、人生に煩へる人も、苦

痛に悶ゆる者も、奮闘せんとする人も皆來りて大師様の膝下に侍り、偏に大師様の大誓願にお縋り奉るべきであります。

乗り得たる身こそ安けれ船の中

しらぬながらに進む彼の岸

風波荒き人生の航路にあるお互は此大誓願を信じ、その御慈悲の大船に我全身とすべて
の運命とを托しさへすれば、行住座臥いづこも大悲願船の中、いつも暖き慈
悲の光明に照されて、知らぬながらに救済の御手に攝取せられ歡喜に充實する彼岸に到
達すること露疑ひないのであります。(石原徹猛)

三 學問及び御修行の事

私は我が宗祖大師御幼少の御時の御事跡を御話し致しますが、我が大師は大權の聖者に
あらせられ二佛中間の大導師として御誕生遊ばされたのでありますから、御幼少の御
時から既に世の人に異る所が多いのであります。

我が大師は御幼名を眞魚と申しましたが、五六歳の御時には常に八葉蓮華の中に坐し
て諸佛と共に御話をせられる夢を見て居られたと申します、けれども之は他人は愚か御
兩親にも御話せられなかつたと云ふことであります。

十二歳の御時に御兩親が我が子は昔は佛弟子であつたに相違ない夢に聖人の僧が天竺
から來て我が懐に入らるゝのを見て遂に懐胎誕生したのである、されば今生にも亦出家
させたいものであると御話なされて居るのを側にて聞かしめられて、心の中に深く喜ば
れ、其後は泥土を以て佛像を造り又御家の邊に童堂を造つて之を祭り禮拜を事とし
て居られました、其他都ての御所作が全く普通の小兒とは異つて居る所から世には眞魚
様に綽號して貴物と稱へて居つたと云ふことであります。

サテ此所に母方の叔父伊豫親王の學士阿刀宿禰大足と云ふ明經の鴻儒が居られました
今此貴物を出家させるのは最も惜みことである、如何にもして世俗に留め置き將來官
務を執らせられたならば必ず高位高官に昇り名を後世に遺すであらうと考へられ、遂に御兩
親と御相談の上、縦令出家させるにもせよ一通り文章を學び儒教を習はせねばならぬと

云ふことであつたので高祖は十二三の御頃、先づ論語孝經等を御學びなされました。更に又十五歳の御時に御兩親に暇を乞ひ古郷を去つて京都へ上り大學へ御入學なされ、日夜孜孜として智識の研磨品性の涵養に身心を御碎き遊ばされました。

所が世間の學問は唯だ現世の事のみを説いて未來の事は更に説かず、誠に淺はかな物であるから、我が大師の如き出世利物の御望を持たるゝ御精神には何となく飽ち足らぬ所がありませぬ、そこで石淵の勤操大徳を尋ねて佛敎を學ばれ、大徳から虚空藏菩薩求聞持の法と云ふのを御授かりなされ、十八九歳の御時四國に渡り、阿波の大瀧の嶽、土佐の室戸の崎なぞで、此法を御修行なされ、大瀧の嶽では惡龍を退治し、室戸の崎では明星天子の影向を感せられました、又更に山陽に移り東海に行つて種々難苦の御修行を御積みなされたことは御遺告に「厥苦節則嚴冬深雪被ニ藤衣ニ而顯ニ精進道ニ炎夏極熱斷ニ絶穀漿ニ朝暮餓飢」と仰せられてあるのを拜讀しても能く分ります。

佛敎の御研究と此等の御修行とに依つて彌々出家の御決心を固められましたが、外舅阿刀大足等の人が頻りに出家することを嫌ひ、出家すれば忠孝の道に背くから悪いと

云うて引き留めやうとする所から、遂に雙鞮指歸と云ふ一冊の書を著はし、釋李孔の三敎は共に忠孝を教ふる者で、道に背くと云ふことは更に無い、中にも佛敎は最も深く勝れた者で、此に依らねば眞實の忠孝は盡されないと云ふことを明白に御記しなされました。今日ある所の三敎指歸は右の雙鞮指歸を御訂正遊ばされたものであります、其中に「余思物情不レ一飛沈異レ性、是故聖者驅レ人敎網三種所レ謂釋李孔也雖ニ淺深有レ隔并皆聖說若入ニ一網何乖ニ忠孝」と云ひ或は「僕聞小孝用レ力大孝不レ匱」なぞ、仰せられてあります、此意は三敎は皆忠孝の大倫を教ふるもので其精神は少しも變らない、孰れに依るども決して忠孝の道には違はない、併し其中にも儒敎は最も淺く、道敎は之に亞ぎ、佛敎は最も深い敎であるから、其等の敎ふる所の忠孝も亦隨て大小がある、儒敎の忠孝は淺く、道敎の忠孝は之に次ぎ、佛敎の忠孝は最も大なるものである、今其の淺く小なる者を捨て、最も深く最も大なる者を取ると云ふ意味であります。

サテ此の雙鞮指歸と云ふ書物は一日一夜の間に御作りなされたと申すことでありまして、ツマリ御出家なされるに就いて反對の人達に御自身の決心を示される所の御意見書

でありますから、遂に之を四刀大足を始め其他親戚の博士達に御示しなされ、断然石淵の勤操大徳を師として御出家遊ばされました。

千有餘年後の今日に至つて二佛中間の大導師として吾々御互を御導き下さるのも全く此等御青年時代の御修行の功績に由るものと伺ひ奉ります、それで此御教を受けて居る吾々御互は亦日夜に信受奉行するのが何より肝要のことと思ひます。(井本琢明)

四 眞言秘密の御經を得給ふ事

我が宗祖弘法大師は御幼少の時から末代の愚蒙なる吾々衆生を救はんとの御誓願にて御年二十才の頃までに、既に世の中の學問は申すに及ばず日本に傳つてある所の一切の佛敎は残らず御學びになりました、けれども此等は何れも皆な淺畧の法門で末代の衆生に現當二世の利益を興ふべき眞實の法門でないことを火を見るよりも明かに御見ぬさなされて、何うかして一切衆生を救ふべき最爲第一の法門を求めたいものぢやどの御思召で或る夜深更に及びて佛前に花を捧げ香を焚き端坐合掌して心を静め「三乘十二部經も

心神に疑ひありて未だ以て決をなさず唯だ願くは三世十方の諸佛我れに不二を示し給へ」と一心不亂に御祈誓を籠められました、所が諸佛の感應空からず「上は上根上智より下は下根下劣の輩までも漏さず助くる法門とては法身大日如來の説き給ふ眞言秘密の外になし、是ぞ汝が今要むる不二の妙經なるぞ」と御告げがありましたので、大師様は佛我が大願を容れ給ひ末代の衆生を救ふべき大責任の勅命を我れに許して今こゝに秘藏の寶を開くべき神秘の鑰をば御與へ給ふかと邊り四方を見回させ御告げの如き經は更になく、イザ之れよりは御告げのありし衆生救ひの妙經の所在を求めむと花の都を後にして聖經探求の途に上られました。

サテ只今なれば流車流船の便もあり海邊山路も開けてあるが、高祖御遍曆の砌には山に道なく川に橋なき有様で何處に行くにも不便勝ち、カテ、加へて其の尋ぬる經文が先來未聞の經典ゆゑ世の識者學者も其名をだにも知らず、日本國中至る處東よ西よ南よ北よと御尋ねになりました、凡そ星霜十年の長い月日を費しましたが、どうしても見當りません、ソコで我が高祖は御心の中に佛は妄語し給はず昔佛の告げ給ふ所の眞言秘密不

二の妙典といふは必ず在るに相違ない而るに今尚ほ得ることの出来ないのは定めて我信心の足らざるに依ると御思召して御年三十才の頃大和國高市郡久米寺の東塔に御こしなされて再び佛前に香を焚き端坐合掌して心身を佛陀に供へ「此の經を得ざれば衆生を救ふこと能はず吾が此の願もし成就せずんば此座を起たじ」と無二の大願を起されました。ナント皆様大師様の御慈悲の深いこと誠に有り難く骨身に徹るではありませんか「吾が願もし成就せずんば此座を起たじ」と御祈願下さるといふのも全く末代の吾々を救うて下さらうとの爲めではありませんか世の中に兩親程親切なものはありませぬがソレ已上の御親切ではありませんか。

かくて三七日の間座を起たずして一心に御祈誓遊ばされました、世の諺に一心は岩をも通すとか、精神一到何事かならざらんとか、申しますがかくまで一心不亂の御祈誓に對してナンデ感應のない事がありませうか、遂に三七日結願の日感應空しからず不思議や夜中萬籟寂として邊り聲なき頃何處ともなく「佛慈、機に應じて汝の願に隨ふ、汝が求むる經は此露柱の柱心に韞む」と御告げがありました、そこで柱心の下の方を御覽な

されすと「駄都是釋尊之遺身經王遮那之全體也然而山國片域大機未熟仍留此法於斯地」將待機所待時也來葉必弘法利生之菩薩來而可恢此教於世」と記してありましたから開いて御覽になりますと、そこから大日經一部七卷が顯れ出でました、之れが即ち六波羅蜜經に謂ふ所の上は上根上智より下は劣惠愚鈍の吾等を始めとし、前四藏の教益に漏たる誹謗正法唯除五逆の罪人までも餘さず洩さず助け給ふと云ふ眞實醍醐の眞言陀羅尼の法門であります。

こゝに於て我大師様はやれ嬉しや末代衆生を救ふべき法門は之れに過ぎたるものはなしと御喜びなされ、遂に遠く御入唐なされて増々此法門を御磨きなされ、吾等如き末代の衆生に現當二世の御利益を御與へ下さる様になつたので御ざります。醍醐天皇様より延喜二十一年弘法大師の詔號を賜はりましたのも、全く此「弘法利生之菩薩來而可恢此教於世」と云ふ御文に由りたものであります。

私共は此時より現當二世の安樂を得られる有り難き幸福者となれたのであります、かく有り難き御法門に遇はして頂くは全く大師様の御慈悲の御心より出たのでありますか

ら、吾等末代の智慧の眼開けず罪業の深き凡夫は、偏に大師様の御慈悲を仰ぎ信心培増
することが肝心であります。(増田慈照)

五 震旦へ渡り給ふ事

大師様は諸佛の御告によりて久米寺の東塔に納めたる大日經を感得遊ばされ、天にも
登る喜びを以て御覽なされましたけれども、眞言の法門は諸佛の秘密で相承口傳を第一
とする者であるから經文を見た計りで解る者でありませぬ、いろ／＼と學者大徳に遇う
て御尋ねなされましたけれども日本國には傳へて居る者が一人もありません、ソコデ支
那へ渡つて此法を授からねばならんとの御思召で勤操大徳に御相談の上、入唐の奏狀を
上られた所が桓武天皇御嘉納あらせられて直に勅許を下され、延暦二十三年六月一日
遣唐使藤原葛野麿等の船に乗りて難波の津を船出なされ、宇佐八幡に海路平穩を祈りて
心經百卷を奉納し、七月四日一行の四船は前後相連りて肥前の田浦を發して愈々八重の
沙路なす大海原に乗り出されました、所が海上俄かに大風に遇うて押し流され一行の四

船は互に行くを知らず、橋摧け帆破れ波に漂ふこと二ヶ月餘りにして、大師の御船は
漸く福州と云ふ處に到着致しました、通常入唐の船は揚州か蘇州に着く事に定まつて居
たのに、今は福州に着いたのであるから、福州の刺史は深く怪しんで上陸を許さず荏苒
二ヶ月を過ぎました、此の間遣唐大使は度々手紙を書いて刺史に上陸を乞ひましたが更
に功が無いので、大使歎きの餘り我が大師に向ひ、尊師はかねて文章の達人にまします
事ゆゑ何卒我に代て文章を認め眼の前の苦を救ひ給へと申されました、此に於て我大師
は大使に代りて文章を作り之を福州の刺史に與へられました處が、刺史は其文章の非凡
なるに驚き俄に上陸を許し鄭寧に取扱ふ事になりました、それから長安の都に奏上した
所が早速勅命が下り旅館を建て厚く饗應し、改めて七珍の鞍を置きたる馬を送りて迎へ
られ、威儀堂々として長安に入られました、その行列の立派であつた事は筆にも言葉に
も述べ盡されない程であつたと云ふ事です、かくて長安に入り日夜師と仰ぐべき大徳を
御尋ねになる間に、青龍寺の惠果和尚にお逢ひなされました、和尚我が大師を見て「我
れ汝を待つこと久し、此士の化縁將に盡なむとす、何ぞ來る事の遅かりし、早く傳法の

支度を備へよ」と仰せられ、直に兩部大法傳授の道場を莊嚴し、先づ胎藏界、次に金剛界の灌頂をお受けなされました、而るに我が大師壇に登りて華を投ぐる時、金胎兩部共に中台大日如來の處に華が落ちましたので、和尚大に驚いて不可思議々々々と御讚嘆なされ、號を遍照金剛と御授けになりました、今も大師を拜する時南無大師遍照金剛と申すのは此から起つた事であり、斯く眞言不二の法門一切を一器の水を他に瀉すが如く一滴も漏す事なく授かり、和尚の御指圖に隨て諸佛の尊像及び經論を書寫し、其他佛器を作り、祖々傳來の靈寶をお授かりになりました、青龍和尚は其年十二月即身成佛の道金剛胎藏兩部の大教は今残らず汝に授け畢ぬ、日出づれば月入り油盡きぬれば燈さゆるは物の常の理なり、菩薩も留らず如來も滅す、我れ亦入滅すべし、我れ初め汝が來るを見て命の絶む事を懼れたり、今付法終りて我願も亦足れり、汝は早く歸りて此の法を國家に奉り、天下に流布して蒼生の福を増すべし」と御遺言なされて十二月十五日終に御入滅なされました、斯くて大師は多年の志願たる眞言不二の法門を傳へ入唐の目的を達せられましたから、翌大同元年經論道具等を携へて御歸朝なされ、請來せる所の經

論法器の目錄を平城天皇に奉りし所、天皇深く歎感あらせられて眞言密教弘通の勅許を得て廣く天下にお弘め遊ばさるゝ事になりました、か様の次第で眞言秘密即身成佛の法門の我が日本國に傳はり二世安樂の御利益を蒙る事が出来るのは全く我が大師の御苦勞に依るものでありますから、晝夜不斷に我大師の御恩を忘れてはなりません。

(雲峰天壽)

六 清涼殿即身成佛の事

我が大師が支那から御歸朝になり眞言秘密即身成佛の宗旨を御傳へになりましたが、當時我國に弘まつて居た宗旨では三大劫の長い間かからねば佛にはなれないと云ふ教であるから、其様に易々と佛になれる譯のものでない大に反對しましたが、弘仁四年三月十五日各宗の大徳達が宮中清涼殿に參内しました時に、時の天皇陛下は佛法歸依の御志厚い御方でありましたから佛敎に就て色々御尋があり、各宗の大徳達は夫々宗旨の肝要を申し上げ、且つ法相宗には唯識中道の理を説き三輪宗には八不正觀の奥を述べ天

台宗は一念三千の極を盡し華嚴宗には十玄六相の妙を談じて我が大師の即身成佛説を盛
 に批難せられました、その時我大師は大日經金剛頂經菩提心論等の御説を證據にして、
 即事而真で佛と衆生とは本來別なものではない、凡夫と佛とが別な様に思ふのが迷の本
 で、煩惱と菩提とは同一體、肉體と精神とは不二なものであるから、身口意三密の加
 持力によつて即身成佛出来るのが當然である、煩惱を滅して菩提を得るだの肉體を離れ
 て心が成佛するだのと云ふのは眞の菩提實の成佛でない主張せられました。此の煩惱
 と菩提と同一體と云ふのは譬へて申せば子供を可愛がると云ふことは同じでも、愚な親
 は子供の愛に溺れるから其子供が愚人になるが、賢い親は愛情が強ければ強い程愛に溺
 れないから其の子供が立派な人になる、即ち愚な親の愛が煩惱なら賢い親の愛は菩提で
 ある、其れと同じく凡夫には煩惱でも佛には菩提である、凡夫のなすことが佛のなさる
 ことと全く違つて居るのではない、従つて生佛不二である、凡夫の肉體を捨て、佛
 になると云ふのは道理に合はないことである。斯様に道理を盡して述べられたものです
 から、各宗の大徳達も是に對して一言の應對も出来ませんでした、其のとき天皇陛下は

御翠簾の内から道理は至極して居るが實際に出来るものか其證據が見たいと仰せられま
 した、乃で大師は南に向ひて結跏趺坐し印を結び眞言を唱へ三摩地の觀に住せられます
 ると、忽ちに御頭に五智の寶冠顯はれ金色の光明熾灼として大日如來の御姿になり宮殿
 の中は宛然密嚴淨土の相となりました、其の時百官諸司各宗の高僧何れも皆地に伏して
 禮拜し奉り上御一人は翠簾を出で玉座を下りて南無遍照金剛と禮せられました、即身成
 佛に對する疑は頓に解け他宗の高僧も邪見の角を折り大師の御弟子になつたものも澤山
 にありました。

現今の物質主義に偏りた者は科學で説明の出来ない不思議のあることを知らぬからし
 て、親から生れた人間が光明を放つたとか宮殿が淨土になつたとか云ふと信用しないが
 是を信することの出来ない者は其丈智識が低いのである、徒に人間の心で考へ出した學
 問を最も確なものと思つて居るからである、併し今日の學問で分らないものは澤山ある
 千里眼の婦人ですら箱の中のものや遠い所の事を知つたり頭から光明を放つたりするで
 はありませんか、是等は今日の學問では説明の出来ないことです、固より大師の即身成

佛は斯様な千里眼なんかとは似ても似つかぬものではあるが、只の婦人や子供ですら出来るのですから、大師が即身成佛せられたのは當然であります。又今日の學問では説明が出来ないけれども、眞言の教の方では大師御作の即身義に委しく説明せられてあります。結局前に申した生佛不二の道理と三密加持の力によつて即身成佛が出来るのです。金剛頂經に若し能く此勝義によりて修すれば現世に無上覺を成ずることを得と説かれてあります。して見れば大師は清涼殿に於てのみ即身成佛せられたのではありませんが、御一生涯になされたことは人間では出来ないことをなされ、又大慈悲の御心を以て常に我等の爲に御苦勞下さつて居るのは全く即身成佛の御所作であります。眞言宗の法門は即事而眞即身成佛の教であるから、お互は假令即身成佛は出来ないでも、成るべく此世で立派な生涯を送りて死後のことなどは全然大師に御任せ申して置けば未來で成佛出来るのは必定です。然るに此世は如何でもよい未來で淨土往生しやう杯と云ふのは大きな間違であります。(吉祥眞雄)

七 神泉苑に雨請し給ふ事

天長元年と云へば今から千八十八年の昔であります。此の年の春吾が日本は大旱魃で春であるのに花は咲かず鳥は鳴かず青々として居た松の葉迄も黄ばんで落ち草は枯れて、見渡す限り野も山も日毎に増す炎熱に焼けんとする有様で、池にも川にも一滴の水もなく、泉と云ふ泉は皆涸れて、鳥獸の畜類も諸國の民も水に渴れて壽命を縮むるもの數限りない、夫れであるから人々は若し此の有様で暫時でも續くものならば吾々は到底助からぬ早く雨が降ればよいがと雨を得る事恰も我が命を得る如くに待ち焦れて居たのである。時の帝淳和天皇深く此事を御悲歎遊ばされ直に大師に雨を祈つて萬民を安んじよめよとの勅命がありました。大師は勅を拜して神泉苑(今尙京都御池通)に瑜伽壇場を築いて七日の間大雲輪請雨經の秘法を修せられたが一向に雨の降る様子がない、是れは如何した事かと定に入つて觀じ給ふに、降らぬも道理、京都西寺の守敏僧都が大師の御威名を嫉妬んで南瞻部洲の龍王を水瓶の中に封じ込んで居るからである、但し北天竺

大雪山の北にある阿蘇達池の善女龍王丈は残されて居る、夫れで大師重ねて一七日の修法を申請けて此の龍王を勸請し秘法の御祈禱をなされた、龍王祈誓に感じ法儀を喜んで金色八寸の龍王となり長さ九尺計りの青龍の頂に乗つて神泉苑の池中に現はれた、眞雅實惠堅惠等の御弟子たち親り之を觀られて、此由を天皇陛下に奏し奉られた處が天皇深く御喜び遊ばされて、和氣眞綱を勅使として御幣供物を龍王に擧げられた、須臾して風起り雲覆ひ雷響いて甘雨三日の間止まず、草も木も青葉に茂り鳥獸迄蘇り五穀の種も芽立つて、上御一人より下庶民に至る迄の喜び實に想像だに及ばぬ程でありました、若し此時大師なくして請雨の祈禱するものがなかつたらば、吾が日本は如何であらう、或は幾萬の聖靈を亡くして今日の如く世界に誇るべき強國となつて居ないかも知れぬ、思へば誠に有難き事である、神泉苑請雨の御祈禱は實に吾々國民に取つては深く記憶し且つ感謝せねばならぬ所である。

因みに加持祈禱の事をお話しせねばならぬ、宗旨に依ては加持祈禱を迷信だと云つて排斥する者があるが、此等は全く加持祈禱の法を傳へず眞言秘密の法門の何物たるかを知らざる者の云ふ事取るに足らぬ事である、他宗の中には唯だ惡を止め善を勧める教へ計りで、加持祈禱の法は更に無い事であるから、加持祈禱が迷信か迷信でないか、効験の有るべき者か有る可らざる者か、解らう筈がない、我が眞言秘密法門の中には法身如來直説の三密加持の法門が整然と傳はつてゐるから、弘法大師以來今日に至る迄加持祈禱の効験を顯はせる事數限りを知らず、是を以て廣く衆生を濟度して居るのである、事實が證明するのであるから、なんとも仕方があるまい、加之眞言秘密の加持祈禱と云ふ者は六大無碍生佛一如の原理に基き、法身如來自ら三密加持の法門を御説きなされた者であるから、嚴然たる道理の備はつて居る者である、若し之を疑ふならば自ら眞言に入つて其法を傳へて修して知るべきである、傳へず知らずして誹謗するは愚人狂人の所作と謂ふ可きである。

大師の御一生は實に加持祈禱を以て上御一人の勸慮を慰め奉り民を安んじ國を護られたのでありますが、今も尙加持祈禱の法の傳はりて吾々其御利益を蒙る事の出来るのは、偏へに我が大師加持力の致す所であります。(藤田智燈)

八 いろは歌を作り給ふ事

お互に美しい花や雪の景色を眺めて楽しんで危険な處に氣を付けたりますることの出来るのは全く眼があるからです、されば眼と云ふものが身體の中で一番大切なものである世の中に眼の見ゆるものは幸福で眼の見ゆる者は實に不幸である、併し世間には二の眼はよく見ゆるても心の眼の見ゆる人が澤山ある實に淺ましい事じや、お大師様は佛眼と申す慈悲の御眼で誠に可憐なものじやと御照覽遊ばされ、一人息子が不養生して居るのを親が側に見て案じるにも猶勝る御苦勞で、眞言秘密の御教を御弘め下されたのじや、尙も女子供に至るまで佛法の道理をたやすく會得させて心の眼を開かせてやりたいと色々御思案遊ばされて、ふと涅槃經といふ御經文を御覽なされると、コハそもいかに佛御一代の御教の精髓を纔か四句の頌文についである、そこでお大師様は此のお經文を日本の歌にお作り遊ばされ「いろはにはほとりぬるを、わがよたれぞつねならむ、うゐのおくやまけふこゑて、あささゆめみしゑひもせず」と御詠なされました、僅に四十七字

であるが其の中には深い／＼佛法の意味が残らずこもつて居るのでありますから、一口には述べ盡すことが出来ませんが、略申しますれば、初に「いろはにはほとりぬるをわがよたれぞつねならむ」と云うのは、盛りなる春の花の色もやがて夜半の嵐に散りはてる習ひで、世の中は一として無常ならぬものはないとの意じや、次に「うゐのおくやまけふこゑて、あささゆめみしゑひもせず」と云うのは、かゝる無常の世の中は皆迷の前に顯はれたもので、迷があるから様々の苦みを受ける、佛法の教に縋りて修行して迷の雲を除けば常住安樂の涅槃の境界に入ることが出来る、人々佛を信じ法を頼みて修行怠る可からずとの御意である、ザットいへばかうであるが、委しく言へば佛の説き給ふ處の八萬四千の聖教も皆この四十七字に納め盡すのじや、ナント尊い御歌ではありませんか、又この四十七字の御歌はお大師様の大智恵善巧方便のお力で出来たものであるから、一字に千理を含むと申して僅か四十七文字の假名で自由に思ひを顯はし、現在千里の他國に居る兄弟と話しする事の出来る計りでなく、千年前の人に書物の上で話を聞たり、又自分の考を萬年後に生れた人に語り聞かすことも出来る、ソコで世の中は段々開

けて参つて今日の様に文明第一等の國となりましたのも全く眞言不思議の力大師御慈悲の賜であります、叡山の恵心僧都も「このかなは弘法大師が支那に入りて梵字眞言等の密教を傳へて御歸朝の後に作りなされたもので漢籍でも佛法のお經でもこのいるはの文字の外はない」と仰せられてありますが、誠に其のとうりで、お互は生れ落ちるときからこの尊きお經文を唱へさせて頂て居るのですから、そこに氣がついたならお大師様の御恩を思はねばならぬ、寝ても寤めてもお大師さまに育てられて居ることを喜ばねばならぬ、お大師さまは他宗他門の人でも信心せねばならぬのはこゝであります。南無大師遍照金剛。(小島章政)

九 宮中御修法の事

宮中御修法は宮中特別の古典の一に數へられて居るもので、毎年一月八日から十四日までの一週間、東寺の灌頂院で修行せらるゝのであります。遠く溯つて討ぬれば支那印度にてお祖師方が宮中で御修行遊ばされたのに基くことで、大師は此例に慣はせられた

のであります、其の起源は仁明天皇承和元年我が大師御入定の前年朝廷へ上表して、玉體安穩天下泰平五穀豐熟萬民快樂の爲め、正月の始に宮中に於て御祈禱致度と申し上げられました時、天皇深く御喜びなされて直に勅許あり、宮中勘解由司廳を改めて宮中眞言院と勅名せられ、爾來は此處で御祈禱遊ばされる事になり、承和二年正月始めて之を修せられ、それより後千有餘年の間毎年勤められました、明治四年九月太政官布告により諸寺諸山の勅會悉く廢止せられ宮中後七日御修法も同時に廢せられたのであります、が、明治十五年八月に至りて、宮中御修法は歴朝嚴儀慣行の古典に付之を修行致すべし旨御裁可になり、それより京都東寺灌頂院に於て修行することになつたのであります、人の尊きは國王に若かず法の尊きは密教に及ぶものなし、其尊い教の中でも最上の秘法たるものは此宮中御修法であります、是れは天皇陛下の玉體安穩實祚長久五穀豐熟萬民快樂の爲の御祈禱で、大師の忠君愛國の御精神が溢れてこの御修法となつたのであります、これよりさき宮中には毎年正月諸宗の高僧を集めて最勝王經を講讀せしめらるゝ例でありましたが、我が大師が仁明天皇へ奉られた表の中に、唯だ經文を講釋するのは

薬の効能書を讀む様なものであるが、如何に病源を説き如何に薬の性質を知るとても病は決して癒ゆるものではない、必ず法に依つて薬を合し法に依つて薬を服まねば病を除き生命を保持することは出来ぬ、願はくば今より後は眞言秘密の法によりて壇を設け本尊を莊嚴して三密加持の法を修し奉らん、と仰せられてあります、是れが御修法を修する大趣意であります。

現今此御祈禱を修行せられるのは一宗の長者や學徳の優秀なる方々が宮内省から送られた陛下の御衣をお加持するのであります、其儀式や道場は嚴肅を極め道場は晝夜巡査が警護して何人も這入ることは出来ませぬ、その尊嚴なる光景は到底も筆舌を以て充分に述べ盡すことは出来ませぬから、直接に御參詣なされた方が詳しく解つて善いと思ひます、(結願の十四日午前十一時頃から十二時頃までは特別に拜觀を許されます)。本年正月には長者密門大僧正御衣奉還の爲に宮中へ參内せられ、鳳凰間で宮内大臣に面謁せられて上奏文と共に御衣を奉還し併せて加持水一瓶を献上せられたのであります。眞言宗は加持祈禱の御宗旨であるが中にも宮中御修法はその最も大切なるもので、代

々の天皇陛下深く御尊信なされて今日まで傳はつて居ります、是れに依ても眞言の加持祈禱の尊い事が知れる譯で、世の中の病に苦み貧に苦み災難に苦む人々は我が大師の御慈悲に縋り眞言秘密の加持祈禱の御利益に預るが宜しう御座ります。(市橋眞量)

十 御入定の御事

我高祖大師は衆生濟度の爲め二佛中間の大導師として御苦勞遊ばされ、上御一人の歡信斜ならず、下萬民の信仰は子供の親を慕ふが如くでありましたが、承和元年十一月十五日に多くの御弟子達を御膝下に呼び集められ「吾れ永く山に歸り明年三月二十一日寅の刻に入定せんとす、たどへ吾れ入定すればとて悲しみ泣くなよ、一心に金胎兩部の大日如來及び佛法僧の三寶を歸依せば必ず吾れに代りて加護せらるべし、ゆめく疑ふ可からず」と慰め教へられ、翌年三月二十一日寅の刻に至り端坐して印を結び眞言を唱へながら御入定遊ばされました、御年六十二歳であります御體には溜りありて顔色も變らず威儀嚴然として少しも御生前に異らずと申すことであります、御弟子達は元より承知

致されて居りましたが、何分親と頼み師匠と仰ぐ高祖に別れ奉ることでありませうから、泣くなど仰せられしも覺ゆ袖に涙をしぼりつ、徐かに彌勒菩薩の眞言を御唱へ申し、世俗に準じて七日々々の御供養を營み、遂に七七日に奥の院に御定身を納められまし、た、此の事遂に雲深き九重の奥に達し仁明天皇には非常に御嘆き遊ばされ優渥なる御弔詞を賜りました、其の御言葉に嗟呼哀哉禪關僻在凶閑晚傳、不_レ能_レ使者奔赴相_ニ助茶毘_一言_レ之爲_レ恨恨恨易已、思_ニ特魯峯_一悲涼可_レ料、今者遙寄_ニ單書_一弔_レ之とありまして上御一人の陛下ですら御嘆き遊ばすのであるから、下々の信者の悲しみ泣く事は何に譬へ様もありません、心なき草木も枝を垂れ飛ぶ鳥の音も一入悲哀の情に満ち、白晝ながらくらやみとなりた様、上下諸共に途方に迷うて、高祖の御徳を慕ひ高野に来る者數す限りなきことであつたこの事でありませう、其の後も慈鎮和尚の如きは殊に高祖の徳を慕はれまして奥の院に三七日の參籠をせられ皆様の御唱へなされる。

有り難や高野の山の岩陰に

大師は今にをはしますなる

と高祖の御徳を賞嘆された様な次第でありまして、末世末代の者迄慕ひ悲しみますが、高祖は決して悲しみ泣くなよ、吾れ入定の後は兜率他天に往生し、彌勒菩薩の御前に侍り、五十六億七千萬歳の後には彌勒菩薩と共に此の地に來り、我が先跡を訪ふべし、又下生せぬ間は微雲管より汝等衆生の信否を鑑み加護して居るぞよと御弟子に御遺訓を遊ばされ、又高祖御入定の前に陛下に奏上された文の中に「私の臨終の一言を聞届け下されまして眞言密教を御捨て下さらぬ様、私は生々世々陛下の法城となり陛下の法將となりて、寶祚の無窮と國體の強固と護り奉らむ」と御誓ひなされてある、又御入定後八十七年目には醍醐大皇御自ら弘法大師と云ふ謚號を下された時、空中よりして「晝夜萬民を慈んで普賢の悲願に住し、肉身に三昧を證して慈氏の下生を待つ」と御告げがありました、此の様に高祖は御入定なされても決して衆生を見捨て給はず、常に衆生の爲めに國家の爲めに微雲管から照覽なされてお護り下されて居りますから、四國八十八ヶ所を順拜して御利益を蒙り、時々不思議の利益を蒙らるゝことは、皆大師様が一時一刻も吾れ等を加護し下されて居るからであります、お互に大師様が今日も尙は常に陛下の玉

體を加持し奉り國家の安泰を祈り、且つ吾れ等衆生を攝取して現當二世の御利益を蒙らしめて下される事を承知致しまして、誠心誠意を以て高祖の御教に従ひ高祖の慈悲の御手に縋りて片時も忘れぬ様信心致したいものであります。(石川弘應)

十一 御誓願の事

黄昏を報ずる御寺の鐘の音を聞けば、何人でも今日もはや日が暮れたな一と思はぬものはありません、扱て之を聞いて是れ即ち諸行無常の響であると思つて人間の一大事、御互一生の日暮に近づいて居るのであると心づく人は誠に少ないものであります、今の世の現状を見ますれば一時的の利欲や権力やさては名譽の爲めに汲々として朝から夕迄西に走り東に行き、之れを得た時は喜び樂しみ笑ひ興し、若し得られぬ時は怒り罵り悶々煩ひ、果ては罪咎もない妻や子供に迄も慳貪の眼を光らし邪見の焰をばいて、之れ迄樂しい濫い家庭であつたものが忽に破れて親しい妻子と離れ、果ては警察の御厄介になり、未は赤い衣物を着ねばならぬ様な淺ましい心がけの者が決して動かない世の中であり

ります、是等の人々は日の暮れを知て人間一生の暮れは知らず、假りの樂しみは知つて眞實の樂しみは知らず、人道に背くは云ふ迄もなく如來様の御慈悲に漏れる無縁の衆生であるから、因縁の報で必ず未來は四苦八苦の苦しみを受けねばならぬ哀れな人であり、そこで高祖大師様は二佛中間の大導師として御出現なされ、かゝる邪見な人に善心を起こさせ、不信心のものに信心を起させ、信心のものには益々信心を強からしめ、一切衆生を此世彼世共に眞實の安樂を興へたいとの御慈悲から、其の御誓願の御言葉にも「我が後生の門徒たどひ我が現相を見ずと雖、我影像を見る毎に眞相の想を生じ、我教を聞く毎に我が言音の思ひに住せば、我定惠の力を以て攝取して捨てず」と仰せられてあります、此の御文を最少し解り易く申しますれば、我れ入定後に生れる末代の衆生よ汝等には縁薄く顔を會して法を説く事が出来なのだが、後世に我が木像や畫像等の形姿を見る時には必ず我が眞實の身體であると思ひ、我が教へ置いた處の法を後世の弟子等が説く時、必ず我が口から直に言ふ言葉じやと思つて、唯光明眞言を唱ふれば如何なる愚痴なものでも如何なる罪深いものでも、我れ定惠の力を以て必ず汝等を攝取し、此

の世をかけて未来まで、二世の利益を蒙らしてやるぞよや、決して捨てはせぬぞよどの
 仰せであります、何と行き届いた御慈悲深い御言葉ではありませんか、世間には畫像や
 木像の大師様を眞實の大師様と思つて拜ひ事は出来ぬと云ふ人が往々あります、之れ
 は大きな間違で、本質と影像とは元來一つのもので本質の外に影像なく影像の外に本質
 はないのであります、諺にも鯛の頭も信心からと云ふ通りで、況して生身の大師様に形
 取りた靈像に向つて眞實の思ひを爲して信仰せば、感應利益疑ひない事であり、之
 れが即ち眞言宗の四身眞佛の道理でありますから、之の事を能く合點してたゞい大師様
 の御在世に洩れたからと嘆くには及びません、生身の大師様は御入滅ではなく御入定
 でありますから、今に高野山奥院の雲深い所に生きて御座るのであります、肉身の大師
 様の御尊像を拜ひ事は出来ませんが、大師様の木像や畫像のある所又御遺跡の所以世界
 中何れの國でも日々缺かさず分身御影向下されて、吾等一切衆生の苦しみを救つてやら
 うと、哀憐の御手を伸べ下さつて居るのであります、其の御慈悲の廣大なる事は「虚空
 盡き衆生盡き涅槃盡きなば我が願も盡きなん」と仰せられて虚空のあらん限り、衆生の

あらん限り、涅槃のあらん限り救つてやらうとの御誓願でありますから、吾等お互末世
 の衆生は能く此の難有い御言葉を信受し露疑はず、大師様の御慈悲に縋り、誠の心を以
 て朝な夕な御寶號を唱へ光明眞言を念誦して現當二世の御利益を頂く様にせなければ
 なりません。(岡田舜我)

破魔の征途

- 一 來まよ悪魔汝には
我には阿字の劍あり
如何なる術のありとても
まして佛の添ひ給ふ
- 二 貧しく暮す人の子よ
正しき道に勵みなば
歎きて人を恨むなよ
摩尼寶藏は我物ぞ
- 三 病の床に臥すものよ
慈悲のみ心忘ますば
世をはかなみて歎くなよ
なやみは露とさきぬうせむ
- 四 迷の獄の罪人よ
我み佛のたすけにて
自由ならずとて歎かさま
罪の手がせは皆解けむ
- 五 いざ起て諸人いざや起て
精進の馬に鞭うちて
慈悲の鏡に智恵の太刀
悪魔の軍に向はなむ
- 六 來まよ悪魔よせ來ま
まして佛のろひ給ふ
我には阿字の劍あり
何ぞ恐まむたゆたはむ

明治四十五年三月十五日印刷
 明治四十五年三月廿一日發行

編輯
 兼 行人

眞言宗傳道團
 代表者 吉 祥 眞 雄

印刷人

平澤新次郎

京都市下京區坊城通八條南
 東寺町五百四十四番地

發行所

眞言宗傳道團

京都市下京區九條東寺町四十一番地

印刷所

六大新報社印刷部

京都市下京區三智通大宮東入
 坊門仲之町第一番戶



京都三條通小橋西人中島町
 御部三法堂藤田總治
 宗御本山御用達
 振替口座 大阪四貳五九
 同町小橋東入

宗教帽 被布、コ
 改良袴類
 調進所

真言宗聯合事務所御用達
 真言宗各御本山
 京都市高辻通鉄屋町東入

石松彌一郎
 電話下二〇二二三番
 振替(東京)一〇二七六番
 (大阪)三三三一一番

長谷寶秀僧正意匠考案

教王の真髓衲衣の大王
 理趣經衲衣

真言宗各本山
 京都大中學御用達
 智山勸學院

發賣元大住法衣店
 京都市室町繩魚棚上ル
 振替大阪三三三八番

御袈裟衣
 西陣織物
 錦金襴地

本山御用達

藤源法衣店
 加藤源兵衛
 (電話二二五二番)

京都六角鉄屋町東
 振替大阪六三九番

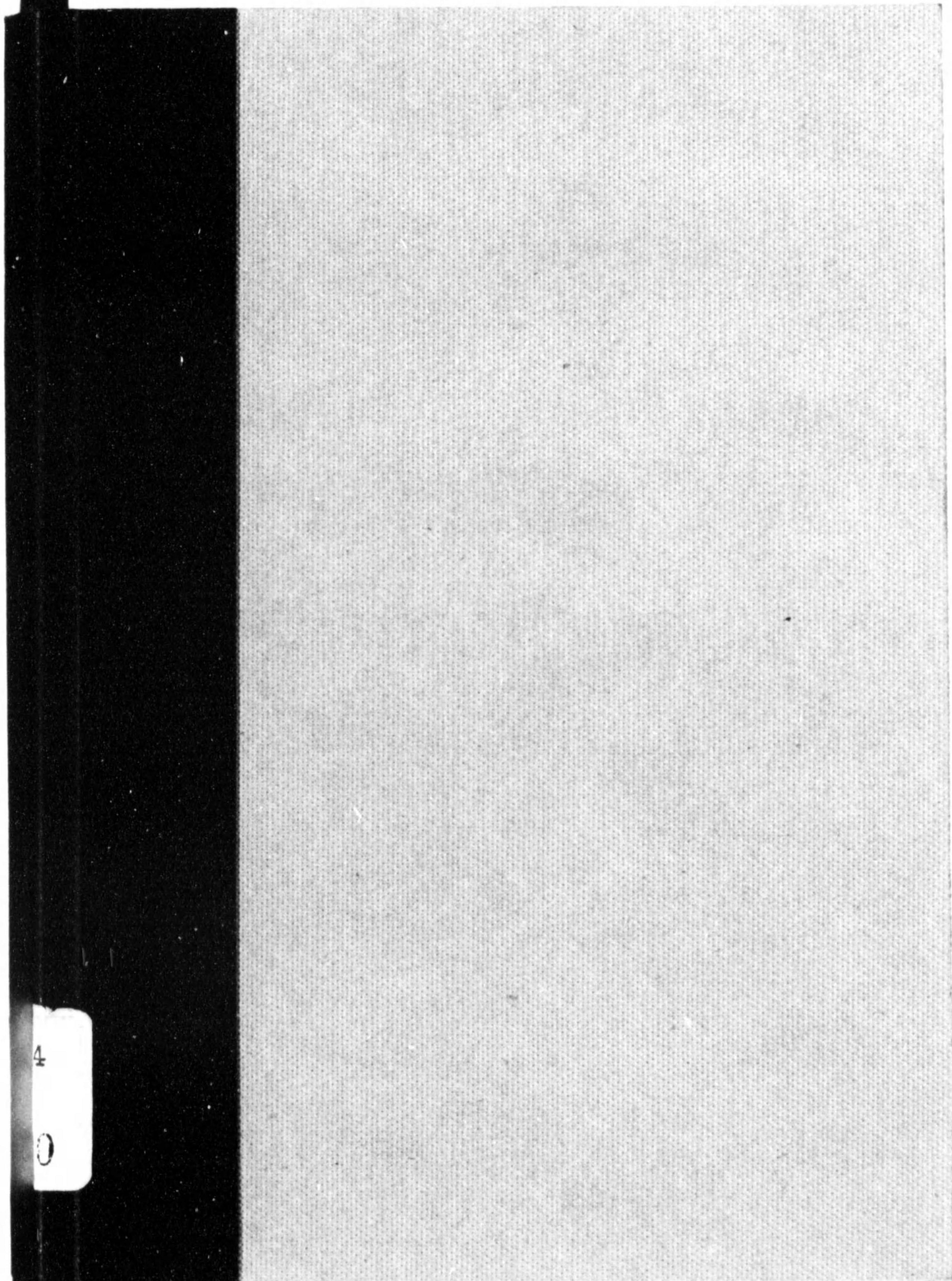
九産扇

扇子

藤岡園扇産

京都六角堂小路

電話三三〇五番



4
0

皇
聖德太子略御縁起

弘法大師 真言宗伝道団

仏道に入るべきいはれ

人の行く道 恭順会

国立国会図書館

016881-000-0

特14-590

弘法大師

真言宗伝道団／編

M45.3

ABE-0099



特

5